

書 評

小杉 泰編訳、『ムハンマドのことはー
ハディース』（岩波文庫青 824-1）岩波
書店、2019年、701 p.

鎌田 繁*

イスラームは神の意思に従う生き方を体現することであり、神がなにを人間に望んでいるのかを知るのがその第一歩である。この生き方の指針は神自身の言葉とされるクルアーン、そして神の使徒、預言者ムハンマドの言行（ハディース）のなかに求められる。たとえば新型コロナウイルスへの対処が地球規模で課題となっている2020年の状況のなかで、ムスリムのメディアはしばしば預言者のハディース、「ある地に疫病がはやっていると聞いたなら、そこには入るな。またお前たちがいる地で疫病が起きたなら、そこから出るな。」（ブハーリー Kitāb 76, Ḥadīth 5787 [Bukhārī 2000]）を引く。ウイルス禍での行動規範に相応しい預言者の指針だからである。

本書はイスラームにあってクルアーンにつぐ第2の聖典といえるハディース、預言者ムハンマドの言行録、の抜粋翻訳である。ハディースはさまざまな学者によって編纂され、膨大な量の言行が残されている。日本でもスンニー派においてもっとも尊重されている2つのハディース集、ブハーリーの編纂したもの（牧野信也訳『ハディース』1993-

94）とムスリムの編纂したもの（磯崎定基・飯盛嘉助・小笠原良治訳『日訳サヒーフ・ムスリム』1987-89）、が全訳のかたちですでに紹介されている。

主要なハディース編纂者から16人を選び、彼らの17点のハディース集から抜粋したハディース本文を、預言者から直接聞いた最初の（あるいはそれに準ずる）伝承者の名とともに、日本語訳したのが本書である。ブハーリーとムスリムのハディース集からとられたハディースが多いが、いわゆる「六書」に限定せず、マワリク（d.795）の『ムワッタア』からナワウィー（d.1277）の『40ハディース精選集』に至るまで、広く文献を渉猟してハディースを選び出している。

選択したハディースは、（Ⅰ）ムハンマドの生涯と時代、（Ⅱ）マディーナの暮らしと社会、（Ⅲ）イスラームの教え、の3つの章に分け、配列している。

（Ⅰ）ではムハンマドの一生を辿るようにハディースを配列する。啓示を受ける前のムハンマドの生涯についてはほとんど知られていないが、彼の系譜といくつかの事績、イスラーム前のアラブ社会の姿を記載したもの。啓示を受け、マッカで迫害に耐えながら教えを広める様子、エチオピアへの信者の一部の避難など。クルアーン（第17章夜の旅）では「夜の旅」にふれるだけだが、それに続く「昇天の旅」がハディースで詳細に述べられ、1日5回の礼拝が定められたこと。マディーナへの移住と新たなイスラーム共同体の生成、マッカとの対立と戦闘（バドルの戦い、ウフドの戦いなど）を経て、徐々に力をつ

* 東京大学東洋文化研究所名誉教授

け、マッカ征服、カーバ聖殿の偶像の廃棄、そして巡礼儀礼を定め、ムハンマドの死の状況を示す記録で終わる。

(Ⅱ) ではムハンマドがどのような生活を送っていたか、彼の衣食住の諸状況を示すハディースをあげる。後半生の最愛の妻アーイシャがムハンマドの最初の妻ハディージャに嫉妬したというハディースを始め、クルアーン(第24章御光10-22節)言及のアーイシャ中傷事件の全体を語るものなど、預言者の妻たちをめぐるハディース。娘ファティマや孫たち、なかには「フサインは私の一部で、私はフサインの一部です」など目に入れても痛くない孫への思いを語るもの。次いでウマルが死を前に後継カリフ選任の手続を示すものなど主要な信者をめぐる伝承。結婚、離婚、家族や母親を大事にすること、男女平等などの言葉。飲酒の禁止、神によって定められているハッド刑、婚外性交の鞭打ち、追放、石打ち、窃盗の断手、自殺を含む意図的殺人や棄教の死刑などの刑罰。葬儀、貸借、商取引、裁定に際して則るべき法源、その他ムスリムの行動を規定する法についてのハディースを提示する。

(Ⅲ) では広い意味でのイスラームの教義に関するハディースを集める。預言者の人物像、啓示の下った状況、クルアーンの書物としての成立過程。ムスリムのとるべき行動と態度、もつべき知識。イスラームの基本的実践と信仰内容である五行と六信をめぐるハディース。天地創造と終末の出来事。死についてとる態度、死んだ者の葬儀、埋葬、墓参などの儀礼についてのハディースで終わる。

ムハンマドの生活点描からは、ヒゲのはやし方、衣服、履き物、挨拶、食事の作法、食べ物好き嫌い、犬、猫、馬についての思いなど、ひとりの人間としての姿が彷彿として来、彼の行動や態度が後のムスリムの振る舞いの目標となって定着しているのが分かる。伝統的にはハディース集の形式は主題別と伝承者別とがあるが、上記のように本書は大枠では主題別の形式をとっている。ただ、伝統的な主題別ハディース集は法学書にみられる項目配列に近いものをもっており、その形式をとっていないという点で、本書は斬新な形式で配列されているといえよう。

本書にはかなり詳しい注がつけられており、本書の価値のかなりはその注記にあるといっていいただろう。ハディースには、伝承経路はもちろんすべて人の名前であり、また本文のなかにも人名が出てくる。ムスリムにとっては周知の人物かもしれないが、一般読者にとっては読む際の苦痛の種である。それらに対して本文の人名は注(たとえば、アブー・フザイファとサーリム p. 96, ザイナブ p. 255)で、また伝承経路は本書では最初の伝承者で代表させているが、その伝承者は巻末の「伝承者略伝」に簡潔な説明がある。十分な基礎的知識もないままに専門的研究をせざるを得ない日本のイスラーム研究者にとってもこれは助けとなる。

該当ハディースについての議論が現代にもつながるという指摘(pp. 94, 351)、アザーンの文言の注記(p. 105)、言及されているサラートの特殊性の指摘(p. 136)、ムハンマドの奇跡の特徴の指摘(p. 147)、別離の

巡礼 (pp. 186ff.) では巡礼の儀礼や作法を注記。離婚のハディース (pp. 358ff.) では離婚の法規定を注記、葬儀での遺体の処置 (pp. 371, 576ff.) の注記、刑罰について実際の運用を注記 (p. 379)、商取引について該当ハディースから導き出される法規定を注記 (pp. 404ff.)。以上ランダムに拾っただけであるが、法学的知見を示したり、現代につながる問題のあることを指摘したり、注は編訳者のもつ知の幅広さを示している。

マーリクの『ムワッタア』は編訳者も記している (p. 687) ように、預言者自身の言葉を引かずに、教友、後続者の言葉やマーリク自身の判断を述べている箇所が多い。Jonathan A. C. Brown [2009: 25-27] によれば、『ムワッタア』の1720項目のうちハディースを引くのは527だけであり、そのうち61ハディースでは伝承経路の記述もまったくないという。ハディース学的な関心をもたない、マディーナの慣行に基礎をおいた法学書であって、ハディースを含むとはいえ、ハディース集ではないといえるだろう。預言者伝という部類の文献にも多数ハディースは引用されるが、預言者伝はハディース集ではないということでそれからは拾われていない。『預言者のことば』という本書のタイトルから考えて、pp. 132, 312ff, 360, 407, 579 にみられる預言者の言葉とは言い切れない言葉は、その背景に預言者の判断が隠されているのかもしれないが、採用には一考を要してもよかったのではないか。

クルアーンに言及する際には、p. 34の注に説明されているが、クルアーンの章名と節

番号 (たとえば部屋章13節) で示されている。原語ではほぼ統一されているが、翻訳された章名は、これまで何種もでている日本語訳クルアーンの間で統一されているわけでもなく、114の章名を順番どおり頭に入れている読者もそうはいないであろうから、クルアーン参照の便を考えて章番号付記があってもいいだろう。

本書は預言者ハディースを紹介するのが主要な仕事であるが、ハディース集にはやや毛色が変わった聖なるハディースといわれるものがあり、本書でも pp. 433f, 509 で引かれている。これは神が語る形式をとる。イスラームの神秘主義において重視されるものが多い。本書には採録されていないが、「私(神)の僕が私を思うところに私はいる。彼が私を想い起こすときには私は彼とともにいる。…」(ブハーリー Kitāb 98, Hadīth 7494) や「私は私と私の僕とのあいだでサラートを半分ずつに分けた。…」(ムスリム Kitāb 5, Hadīth 904) などがあり、後世の神秘主義の展開のなかでしばしば参照された。

本書では、文章は基本的に簡潔ではあるが、背後の文脈の理解なしには文意の把握の簡単ではないアラビア語原文を明快な日本語に移し、その語りの背景となる情報や、後世どのような意味をもつものとして受け入れられたかなど、要を得た注記を施して提示している。ハディース全体のイメージを得ること、そして預言者を中心とした最初期のムスリムたちの行ないや思いを彼ら自身の言葉とおして知ることを本書は可能にしてくれている。ハディースは膨大な量が伝えられてお

り、内容も多様である。その膨大なハディースのなかから一冊の本にまとめられる量のハディースを選び出す仕事は、それ自体ひとつのイスラーム観を提出することである。その意味で本書は、21世紀前半の日本人のひとりのイスラーム研究者の目に映じたイスラームの姿を示しているといっていいただろう。一般読者にはクルアーンとは異なる視角からイスラームを描き出したものとして、また専門に特化したイスラーム関連研究者にもイスラームの基本的メッセージの姿を示すものとして、読まれるべきものであろう。

誤植も少ないが、以下気づいた点を指摘しておく。

p. 285 5行目 (ムスリム『真正集』) → (ムスリム)

p. 436 2-3行目 アッラーの使徒に → アッラーの使徒は

引 用 文 献

- Bukhārī, Muḥammad ibn Ismāʿīl al- 2000/1421AH. *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*. 3 vols. In Jamʿ jawāmiʿ al-aḥādīth wa-al-asānīd wa-maknāz al-ṣiḥāḥ wa-al-sunan wa-al-masānīd. Vaduz (Liechtenstein): Jamʿīya al-Maknāz al-Islāmī (Thesaurus Islamicus Foundation).
- Brown, Jonathan A. C. 2014 (First ed. 2009). *Hadith—Muhammad's Legacy in the Medieval and Modern World*. London: Oneworld Publications.

直井里予. 『病縁の映像地域研究—タイ北部の HIV 陽性者をめぐる共振のドキュメンタリー』(地域研究叢書 38) 京都大学学術出版会, 2019 年, 304 p.

南出和余 *

本書は、著者が 2015 年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した学位申請論文「北部タイにおける HIV をめぐる関係のダイナミクスの映像ドキュメンタリー制作—リアリティ表象における映画作成者の視点」を加筆修正したものである。本書は著者自身による 2 本のドキュメンタリー映画『いのちを紡ぐ—北タイ・HIV 陽性者の 12 年』と『アンナの道—私からあなたへ…』の制作過程が、地域研究におけるフィールドワークかつ分析作業として位置づけられている。しかし興味深いのは、著者がこのフィールドワーク＝映画制作を始めた当初の目的は、博士研究調査ではなくテレビドキュメンタリー番組制作であり、その後、自らの制作過程を自己反省的に分析議論することを研究とした点である。最初にタイ北部で映画制作（撮影前の調査を含む）を始めたのは 2000 年で、論文執筆を念頭においた調査撮影にシフトしたのは 2012 年である。つまりフィールドワークの大半はプロの映像作家としての制作活動であった。ドキュメンタリー映画作家としての映画制作実践の過程を地域研究の一方法論として検証した点に、他には真似のできない本書のユニークさがある。

詳細に入る前に、評者の研究関心を確認し

* 神戸女学院大学